

2016年

立冬号

第 192 号

飛鳥

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所

飛鳥出版室

発行人 永野 正将

〒780-0945 高知市本宮町65-6

電話 088-850-0588

e-mail:info@asuka-net.jp

http://www.asuka-net.jp



太郎、みんなに愛されてます（社屋裏にて）

「わが家の太郎」発売日決定！

かわら版に連載中の「わが家の太郎」が書籍化！
掲載分を余すことなく収録するほか、この本でしか読
めない書き下ろしも。太郎と、太郎をとり巻く人々の
日常にほのぼのと癒やされること間違いなし！
発売日は12月17日(土)に決定！
現在鋭意制作中。ご期待ください！



蜻蛉の現代詩研究	ウカイヒロシ	2
いろいろかいろ 三	安藝真一	4
キルギスタンからコンニチハ ㊹	氏原名美	5
新聞余話③	大澤重人	6
おのころじま奮染記 10	田島征彦	7
出版室より		8
催し物案内板		9
わが家の太郎 ㊹	永野雅子	10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

蜻蛉の現代詩研究

ウカイヒロシ



詩は まさに 原稿用紙には おさまり
 きれぬ 摩訶不思議な生きもの——そう
 原稿用紙が 詩の 檜舞台であるとした
 ら 詩人は その 升目を 無限の可能
 性として 縦横無尽に あばれまくるこ
 とだろう——俳句のごとき 一行詩もあ
 れば 短歌の様した 二行詩も あつて
 しかるべし そして リズミカルに 四
 行詩でまとめた 定型詩が並び それか
 ら 大いに派生して 狭き用紙のなかで
 二三枚程度に おさまりかえり ここぞ
 とばかりに 詩が 詩人によって 踊り
 うかれ 吠えうなり 饒舌し こっけい
 でけてれつな あろうこともない 詩的
 空間を のたうちまわる で しばし沈
 黙したかと思うと 長々しくも 散文詩

新刊紹介



詩集『蜻蛉の夢』
 A6判/254頁/並製
 本/私家版

（本文より）

心の財（たから）

知恵を ひけらかすではない
 知恵は自分の心が 漏れておる
 ていどでよい けっして 他人
 にみせつけるな そうして自分
 が他人に なにかを与えられる
 などと おもいあがるでない
 他人のために生きる にとどめ
 よ 毎日 同じ食物でしんぼう
 し 新しい世界をむやみに の
 ぞきこむまい しかし 経験をつ
 むことを 忘れてはならない
 ぞ 他人の畑に輕輕に出掛けて
 自分の畑とくらべたりはつつ
 しむがよい たまには 生き恥
 もさらしてみることだ 自分と
 いうものがよく みえてくる



などと マスメを めーいっぱい活用して
ゐる いわずもがなの 詩文を 披
露してやまない ほんに つかれをしら
ぬ なにかにとりつかれた 詩人の宿業
であるよ——こうして わが現代詩は
いかようにも 人口に膾炙することなく
独自路線でもって 人間の心の綾を
詩人とともにくたばるまで 彷徨いつづ
ける のであつた いとおしいというか
——？

展覧会『ONL』につどう詩人たちのご案内

詩誌「ONL」^{オンル} 創刊25周年の軌跡をた
どる展覧会が黒潮町にある大方あかつき
館の第23回企画展として開催されます。
歴代の詩誌の展示をはじめ、パネル展
示、同人の既刊詩集・著書、合評会・懇
親会・集会などの集合写真の展示ほか。

▽期間：12月10日～2017年3月26日
▽場所：大方あかつき館2階
（土佐入野駅から徒歩5分）
▽関連行事

・自作詩を読む集い・講演
・文学館「第2回文学講座」1月下旬
～2月上旬頃。会議室など、定員50
～60名
他

恥を恥とも おもわなくなつて
しまつたら 地獄へ行つた方が
ましだろう 生きるきまりは
ちゃんと守るがよからう いつ
までも死にたくない などと
ダダをこねてもらつてはこまる
人は人を好きになつてこそ
人であるとおもう 好きになる
ということは信じる心である
人を信じるについては 当然
裏切られることを 覚悟におか
なくては 信じた意味も なに
もない 歳をとることを 喜び
とし 心が汚れたら 洗つてほ
せばいい うるおいある心やら
痛快な人生は そうそうある
ものではないが 心はいつも
澄みきつた秋空のごと すがす
がしくも そのように 生きた
いもの 人間の心とは 実に
財（たから）なり——

ウカイ・ヒロシ
南国市後免町生まれ。詩誌「ONL」同
人。詩誌「一軒家」客員。詩集、散文集
など数多く出版している。



年賀状

安藝眞一

賀状を描きはじめている。今は十月中旬、やっと宛名書きに入った。それでも少々焦っている。来月(きげ)は十一月。この月の三十日間(さんじゅうにちかん)で残り(のこり)一千枚の宛名(あてな)が書けるや否や(いかん)と心配(しんぱい)で不安(ふあん)が横切(よこぎ)る。

当初(当初)、九月に暦(れき)が変(かわ)った瞬間(しゅんかん)、用紙(ようし)を選(えら)定(てい)して紙問屋(しもんや)に取り寄(よ)せを依頼(いぱん)、一千枚(せんまい)相当(そうじょう)の枚数(まいすう)が到着(たっしやく)する。それを飛鳥(ひてう)で希望(きぼう)の寸法(すんぽう)のはがき大(おほい)に断裁(だんさい)仕上(しじやう)げ。これが眼(め)の前に届(とど)いたのが九月上旬(じゅうがつじやうしゆん)。

イラストを描きはじめる。制限時間(しげんじかん)は九月、十月の二ヶ月間に手描(てがえ)きイラストの完了(げんり)予定(よんぎ)とする。

熱中症(ねつちゆうしやう)を気にする程(ほど)の九月の暑(あつ)さの中で、描(え)く新春(しんしゆん)の気配(きはい)のイラストをイメージするは誠に夏(なつ)・冬(ふゆ)扇(あふぎ)でうろうろと描(え)きはじめて三枚(さんまい)目四枚目(よんまいめ)までは失敗(しはい)敗、五枚(ごまい)六枚(ろくまい)七枚(しちまい)目までは空振(くわふり)、八枚目(はちまいめ)あたりでようやく新春(しんしゆん)の風情(ふうせい)が絵(え)の具(ぐ)の色(いろ)に出(で)はじめ、どうにか仕上(しじやう)がると次(つぎ)は九枚目(きゅうまいめ)十枚目(じゅうまいめ)と続(つづ)くが同じ気配(きはい)は繰(くり)返(かへ)せず、又(また)新(あらた)に一枚(まいまい)と一心(いっしん)不亂(ふらん)に描(え)き進(すす)める。十月(じゅうがつ)の声(こゑ)を聞くころになつて、どうにか三百枚(さんぱくまい)程(ほど)が描(え)き上(あ)った手応(ておへ)えが續(つづ)いてやがて四百枚目(よっぴゃくまいめ)に手(て)が届(とど)く。描(え)く程(ほど)に夏(なつ)の盛り(さか)りの中(なか)での新春(しんしゆん)の気(き)を曳(ひ)きずるのは誠に至難(しじなん)の事(こと)と一枚(まいまい)毎(まいまい)に思(おも)い知(し)るが、乗(のり)りかかつた舟(ふね)をおりるわけにもいかず。思(おも)いつめて描(え)き通(とお)して千枚(せんまい)の仕上(しじやう)げに届(とど)いたのが十月(じゅうがつ)の中(なか)旬(しゆん)。絵(え)の具(ぐ)の乾(かわ)きを待(まち)って「賀詞(がご)」を書(か)き、やがて「年号(ねんごう)」を記入(きじり)して「落款(らくくわん)」を捺印(なつしん)。で仕上(しじやう)がりまで数(かず)えて一人(ひとり)一枚(まいまい)当(あた)り七回(しちかい)から八回(はちかい)の手入(ていり)れをへて仕上(しじやう)がる事(こと)となる。こまではイラスト面(めん)の事(こと)で、あとには宛名(あてな)書きの制作(せいさく)が待(まち)っている。だいぶ以前(いぜん)に「虚礼(きよれ)廃止(はいし)」なる

運動(うんどう)が世間(よかん)に起(お)り、様々(さまざま)な無意味(むぎみ)な礼節(れいせつ)を廃止(はいし)しようという次第(しだい)があり、御礼(ごれい)や御中元(ごちゅうげん)に加(く)えて、年賀状(ねんがじやう)も虚礼(きよれ)のバツシングを受(う)けた時代(じだい)があつた。考え(かんが)えれば成程(なるほど)に虚礼(きよれ)かと年賀状(ねんがじやう)を省(はぶ)みて、早速(さつそく)に運動参加(うんどうさんか)と賀状(がじやう)を出す事(こと)を止(と)めた年(とし)があつた。そんな騒(さわ)ぎの最中(さいちゆう)の年(とし)にも到着(たっしやく)した一束(いつしゆ)の賀状(がじやう)を受け取(と)った時の暖か(ぬか)さが忘れ(わす)れられず、軽率(けいそつ)に廃止(はいし)した自分の杜撰(ずせん)さを思(おも)い知(し)った事(こと)がある。それ程(ほど)に、年に一度(いちど)の挨拶(あいさつ)に情感(じんかん)がこもつていた。考(かんが)えて見(み)れば一年(いちねん)に一度(いちど)会(あ)うか会(あ)わな(な)いかの交遊(かうゆう)に差(さ)し出(で)される一枚(まいまい)の賀状(がじやう)。その温度(おんど)に頭(かぶ)が下(くだ)がる。この一礼(いちれい)をこそ贈(くわ)り出すべきと念(ねん)じ、以来(いらい)三ヶ月(さんげつ)にわたる作業(さぎやう)を續(つづ)けている次第(しだい)。それもこ

とに確立(かくりつ)し独自の風格(ふうかく)をそなえてくるのである。十月十日(じゅうがつじゅうにち)に書きはじめて、とりあえず五十名(ごじゅうまい)程(ほど)の宛名(あてな)を仕上(しじやう)げたが気(き)になるのが残り(のこり)の日数(にちすう)。あと十日(じゅうにち)と十一月(じゅういちがつ)の三十日(さんじゅうにち)で四十日間(しじゅうにちかん)で千人(せんにん)分の宛名(あてな)が仕上(しじやう)がるかどうか。郵便局(ゆうびんきょく)での最終(さいしゆう)締切(しきり)は十二月二十五日(じゅうにがつにじゅうごにち)頃(ころ)だから少々(しょうしょう)のゆとりも考(かんが)えられなくもな(な)いが油断(ゆだん)が出来(でき)ない。私製(しせい)はがきだから切手(きて)を全枚(ぜんまい)に貼(は)らねばならぬ手間(てま)も計算(けいさん)に入(い)れると日数(にちすう)は切迫(きつぱく)してくる。日常(にじやう)繁事(はんじ)の予定(よんぎ)が狂(くる)うと遅(おそ)れも百通(ひゃくつう)程(ほど)出(で)るかも知(し)れな(な)い。宛名(あてな)は一筆(ひとしづ)ごとに仕上(しじやう)げると十分(じふぶん)な完了形(げんり)の顔(かお)つきとなるので安心(あんしん)だが、要(い)は休(やす)まず休(やす)まずの執筆(しつぴつ)が續(つづ)けられるかどうか肚(はら)が坐(すわ)るこのごろである。

この試練(しれん)を抜(ぬ)けて千枚(せんまい)の賀状(がじやう)が十二月初旬(じふにがつしちしゆん)に切手(きて)も貼付(は)して整(ととの)うと九月(くわがつ)からの百日(ひゃくにち)戦争(せんしゆ)も終(は)り、新春(しんしゆん)への送り込み日(おくりこみにち)を迎(むか)える。

了



「世間」の温度差

氏 原 名 美

うじはら・なみ

高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

毎日ニュースサイトに目を通していても、実感できないのが日本の状況だが、九月、二年ぶりに一時帰国して、「虐待死、過労死」のニュースに考え込んだ。日本人なら、テロの脅威よりも身近な危機感を抱いている問題ではないか。「カローシ」は、国際語彙の仲間入りをしているほど日本に特有の現象らしい。仕事が自殺の引き

金となったと聞いても日本人は驚かない。社会が、残業も休日返上も当たり前だと思ふ風土を作り上げてきたからだ。入社したその年に自ら命を絶った女性……。過労自殺が労災と認められ、労働局の抜き打ち検査も行われたが、社会の意識が一朝一夕で変わるとは思えない。「世間」が目を見ますには、あと何人の彼女や彼が苦しめばいいのだろう。

学校に上があれば学校が、就職すれば会社が日本人にとつての「世間」になるのは、中根千枝や阿部謹也の研究によらなくても、日本の精神風土に生きる誰もが経験済みだ。「世間」という概念は、一語では日本語以外のことに訳しきれない。

「世間」は個を認めてくれない。集団の中に放り込まれたら「十人十色」など単なる慰め文句で、所属する「世間」の色にできるだけ早く染まることを強いられる。そのせいか、かつて「協調性がない」と毎年通信簿にコメントされていた元小学生は、それが自分の短所であるかのように五十年以上経つ

た今も感じてしまう。

キルギスの人々にとつて、仕事と死が結びつくのは、経済苦を脱する選択肢としての出稼ぎだ。毎月のように、出かけた先で民族主義者に殴り殺された人が棺に納められ「帰国」する。過労自殺と同じ、「経済」の犠牲者だ。

羨ましいのは、キルギスの「世間」が日本のような冷たい「世間」ではないことだ。人を孤立させない温かさがある。勤務時間はあつてもないようなもので、自己判断で休んでも許される。遅刻だ、欠勤だ、怠業だ、となじられることもない。「できなかったら明日やればいい、明日できなかったら次の日がある」と気楽に構えていればよい。

「ノルマ」は元々ロシア語だ。ロシア語使用圏であるキルギスでもごく普通の語なのだが、職場でノルマを消化できずに残業する人などまずいない。日本が経済協力プロジェクトとして運営する日本センターでさえ、職員は終業時間きっかりに玄関の外、居残って仕事をするのは、日本人スタッフと

文化担当職員くらいだ。

日本からキルギスへ、無償援助が決まった。国立医療機関その他の機材調達費を日本が負担するというものだ。ところが、援助金を受け取るために必要な法的手続きがキルギス側でなかなか進まない。日本側はもう三年も待たされている。財務省の担当官は滞っている理由を「全関係省庁部局の申請書類の作成と承認審査のため」と説明するが、休日返上で対処するとは言わない。八月、担当部署は一斉に三週間の夏期休暇に入った。

今回は大学から「仕事ばかりじゃなくて、たまには休め」と言われ続けての一時帰国、「担当授業が始まる前だし、一ヶ月留守にするので、よろしく」と上に伝えたら、すんなり認められた。同僚には「メールでしっかり仕事してもらいます」と釘を刺されたが、カローシと無縁の職場はありがた

キルギス日本語チャンネル

— KyrGyz Nihongo Channel —
https://www.youtube.com/channel/UC6ay1J-365gQ8TFMxdIdSua



電話は鳴る前に取れ。
我が社の前身の一つ、大毎^{だいま}(大阪毎日新聞) 社会部の教えです。
鳴る前は無理にしても、受話器を即座に取る精神は社内を受け継がれています。鈍臭い私はいまだにできませんが。

新聞社は、結構古くさい世界です。以前はおつかない上司や一癖ある先輩がたくさんいらつしやり、ひとときわ熱い指導を受けました。

駆け出しの頃、ポケットベルが配備されました。支局から電話をかければ、記者が持参するベルが「ピー、ピー」と鳴り、公衆電話などからかけ直す仕組みでした。携帯電話がない時代はこんな面倒なことをしていたのです。ある支局の上司は、各記者のベルを鳴らし、その応答時間をチェックしたとか、しないとか。若い記者たちは素早い応答に気を遣い、トラツク^{トラック}の方向指示器の「プー、プー」という音にも反応したぐらいです。

後に番号表示ができる機種に変わりました。支局のデスクなら何番、バイト女性なら何番などと決めてあり、番号を見れば誰が鳴らしたかわかるのです。

確か、来日した中国の李鵬首相を取材したときのことです。ベル

大澤 重人

新聞余話 ③

ポケットベルが 鳴りすぎて



めっきり数が減った公衆電話。新人時代には必死で探し回りました(京都市の自宅近くの公園で)

に気づかなかったのか、その瞬間の首相の会話を拾うことを優先させたのか。しばらく電話をかけませんでした。一段落してベルを見ると――。

「34444444444444444444」

こんな数字が目飛び込んできました。ぞっとしました。本来は「34」のはずが、応答がないため、怒りに任せて電話のプッシュボタンの「4」を乱打したに違いありません。とびきり怖い上司です。

恐る恐る電話をすると、「あ●、ほ●、辞●ちまえ!」。反論できる雰囲気ではありません。鼓膜が破れそうな罵声なので、聞いてい

る振りをして受話器を遠ざけ、何秒かおきに送話器を近づけ「はい、はい」と答える、横着な対応でやり過ぎしました。

別の日。車を運転中にポケットベルが鳴りました。例の上司です。気を焦らしながら公衆電話を探します。原稿の問い合わせでした。新聞社では書いたままが紙面化される例は珍しく、デスクらが加筆修正してから掲載されます。

三百字程度の短い原稿の、最初の方の問い合わせでした。後半を読めばわかる内容です。「全部読んでから問い合わせてください」と言いそうになりましたが、言えません。

車に再び乗って数分後。「ピー、ピー」。公衆電話を改めて探します。後半部分の問い合わせです。「まとめて問い合わせてよ」とは言えませんが。出来の悪い記者は学びました。頭から読んで分りにくいところがない原稿を書こうと。そして強くもなりました。絹漉しのようなハートが木綿豆腐ぐらいには。

今、他人の原稿をチェックすることがあります。問い合わせた携帯電話をぶつ切りされても、取材中なんだろうなあと慮り、不明な点は原稿を全部読んでから問い合わせています。内心いくらカリカリしていても。

+

現在は会社からスマホが支給されています。三六五日二十四時間、いつ鳴らされても文句は言いません。いえ、言えません。

おおざわ・しげと

毎日新聞大津支局兼地方部エリア編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。最新刊『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡』で第26回高知出版学術賞特別賞受賞。

おのころじま 大奮染木記

ふんせんき

10. 源平桃

田島征彦



おのころ島へ越して、もう十六年になる。

この家は、もともと小説家の灰谷健次郎さんの家だった。神戸の建築家が設計しただけあって、なかなかセンスが良い。(住み易いわけではないが)それに引き替え、庭木の趣味は、何とも言い難い。灰谷さんは沖繩が好きだ。沖繩の県木はデイゴだが、庭のまん中で、毒々しい花をつけて、大きく繁っているのはアメリカ・デイゴだった。デイゴと違い庭に植える樹ではないと思う。

家の前には、幹廻り2mちかいヤマモモの木がドーンと立っている。この木はオスで、実は成らない。春になると、きたないイモムシの形をした赤黒い花を、多量に撒き散らすのだ。ヤマモモのすぐ横に、押しつぶされそうになって、桃の木が生えている。ハナ桃なので実は食べられない。集落の桜並木が、花びらを散らしたあと、ハナ桃はなんと、一本で紅白の花を咲かせる。源平桃というらしい。

次の年から、桃の種が、そここにこぼれて、芽吹いているのを見つけた。妻のひで子に知らせると、喜んで庭のあちこちに植え替えたり、近所に配ったりした。こうして、源平桃の子どもたちは、わが黒谷集落に広がっていった。

「桃栗三年柿八年」と言う。十六年の間に源平桃の子どもたちも、一斉に花が開き、春の黒谷を紅白に染めてくれている。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じこくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

「飛鳥かわら版」二〇〇号へカウントダウン!

第2回

年に十二回!?

年に十二回――

一九九二年五月(24号)から二〇〇五年十二月(154号)までの約十三年間は、ほぼ毎月発行していました。今なんて年に四回でも方方からオシリを叩いていただいている状態なのに……なんということでしょう。こまめな情報発信を、という思いはもちろんなったとして、現実的な理由は第三種郵便物の認可(送料をお安くする)ため

だったそうです。25号(一九九二年六月)からは価格が設定されて五円(御縁)、29号には二十円。有料であるということも第三種郵便物に承認されるための必要項目でした。

写植の時代、日々の業務はもつともつと大変で忙しかったに違いありません。いや、はやなかなか……真似できません。当時の担当者、頭に下がります。



時には合併号も……無理な時は柔軟にネ!

▼毎年稲刈の手伝いをしているが、今年は雨の合間をぬって、泥田の稲刈となった。いつもの何倍もの時間をかけて、なんとか刈り終えた。中には、刈る事をあきらめたのか、今も立ち枯れた稲の残る田んぼもある。初めて目にした光景に心が痛む。(しま)

▼三十年ぶりに引っ越しをした。住み慣れた所から新しい所に移ることに非常に不安があったが、いざ移り住んでみれば、

きづな



あらら「とても快適」。住めば都である。すぐ近くにはローソン、本屋、スーパー、郵便局もある。歩いてすぐである。「引っ越し」もいい。(中)

▼右の記事のため過去の号を見直しています。時代を反映した内容、先人たちの記録。様々な思いが溢れる紙面に、仕事が進まへんでアカンでくと頭の隅から注意喚起が聞こえてきてもつい読み入ってしまいます。おもしろいんだもん。(上)

出版物紹介

詩よ家出をしなさい

高知詩の会・発行

高知詩の会の合同詩集。三十二名の会員による、詩、散文などの作品が掲載されている。言葉最後の砦とする詩人たちが、混沌の世の中で生み出した幾多の言葉が収められている。



A5判/150頁/並製本/定価1,000円+税

はりまやばしで有名な

山脇 勉・著

あるきっかけから純真・お馬など「はりまやばし」で繋がる史実に興味

を持った著者が、史

跡や資料を求めて高知県を中心に四国各地を走り回って調べた私的備忘録。地図を片手に読みたい一冊。



B6判変形/336頁/並製本/私家版

催し物案内板〈11月～2017年1月〉

企画展 野並允温傘寿記念個展

～お四国遍路を終えて～

と き 開催中～11月13日(日)

毎週月曜日(祝祭日の場合翌日)

開催時間 9:00～17:00(最終入館 16:30)

※最終日13日のみ15:00まで(閉館は17:00)

ところ 越前町立横倉山自然の森博物館

入館料 大人 500円、高校・大学生 400円、

小・中学生 200円、小学生未満 無料

各20名以上の団体 100円引き、70歳以上 250円、

障害者手帳所持者と介助者 1名まで無料

秋のいけばな展

と き 11月12日(土)～11月13日(日)

開催時間 10:00～18:00(15日は17:00まで)

ところ 高知市文化プラザ かるぽーと7階

第1・第2展示室

入場料 前売券 400円、当日券 500円

第45回 高知大学合唱団定期演奏会

と き 12月17日(土)

ところ 高知市春野文化ホール ピアステージ

開場 13:00/開演 13:30

入場料 500円

平成28年 県展書道 無監査展

と き 2017年1月4日(水)～10日(火)

ところ 高新画廊

開催時間 10:00～18:00(最終日は17:00まで)

入場料 無料

高知学芸中学高等学校マンドリン部

第56回 定期演奏会

と き 2017年1月9日(月)

ところ 高知県民文化ホール(グリーン)

開場 13:30/開演 14:00

入場料 無料

第5回

ものづくり総合技術展

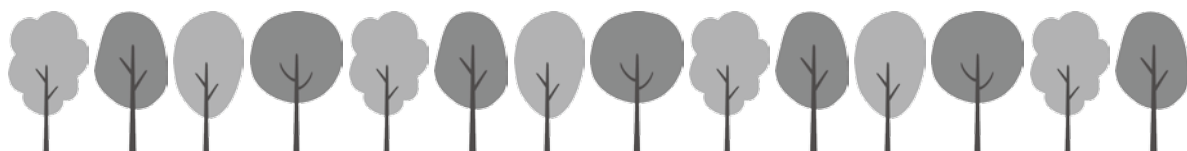
飛鳥も
出展します!

11月17日(木)・18日(金)・19日(土)

10:00～16:00

高知ちばさんセンター

入場無料



ありがとう百年

下駄履きで通えた市民の病院

高橋 トシ・著

四十一年間働き、幾度の闘病生活をした場所である高知市民病院を伝え残したいという思いで綴られた自伝的小説・エッセイ集。長く関わった著者だからこそ知る市民病院の番外的歴史。



B6判/254頁/並製本/頒価1,500円税込

一枚の便箋

細川 藤・著

戦地の夫から届いた一枚の便箋は幸せな一枚だったのだろうか――
亡くなる前に折に触れ書き溜めていた投書等を著者の娘・昌子氏が亡き母に想いを寄せてまとめた遺稿集。



A5判/194頁/上製本/私家版

私家版の出版物は販売しておりません。執筆・編者による譲渡あるいは貸出にて承ります。出版物に関するお問い合わせは小社 ☎0888-550055(8) 出版室担当まで。

印刷屋さんの 「すったもんだ」

代表取締役社長 永野正将



早いもので2016年も後1ヶ月ちょっとです！

今年は「人財」をキーワードに社員教育や採用に目を向けてきましたが、結果的には思うようにいかなかった1年であったと痛感しています。

そんな中でも社員の皆さんの頑張りのお陰で業績は好調に終われそうです。一方で繁忙期には皆が遅くまで頑張ってくれたことを受け止め、来年こそしっかりと教育と採用を行い、会社としても成長し、社員の負担を少しでも和らげ、心からの笑顔と満足を創出できるよう頑張りたいと思います。

今年も皆様よりお引き立てをいただきましたこと心より感謝申し上げます。来る年も何卒よろしく願いいたします。

わが家の太郎 39

スマホ

永野 雅子

スマホデビューした。

太郎の本を出すことになって、「日々のいろいろなシーンを写真に撮って下さい」と言われ、カメラを持ち歩くのも面倒だし、この際思い切ってスマートフォンに変えようということになった。

幸い社員は殆どスマホだから、皆に教えてもらおうと、同じ機種を使う部長に店にも一緒に行ってもらった。

その時点からいろいろの説明を、部長が聞いてくれているからと任せ気分。元々メカにはめっきり弱い私。説明書など読む気にもならない。

手にしたスマホの機能の多いこと。今までの「ガラケー」でも、電話をかける、受ける、メールを数人に発信するくらいしかなかったのに、どうしよう！

翌日の早朝、

「永野さん、今朝五時半頃お電話頂いていますが、何かありました

か？」

えっ！ 掛けた覚えがない。どうも操作をしながら誤ってタッチしたらしい。「ごめんなさい」

そうこうする内、東京へ出張。会が終わってホテルにチェックインした後、久しぶりに息子と会って外で食事をする。私のスマホに何やら「ライン」を入れたそうなので、別れ際、「そのこのコンビ

ニを曲がつてすぐがホテルやき、じゃあ又」と、彼は去っていった。ひとりになつて、言われたコンビニを曲がつて歩くもホテルがわからぬ。そうなると、方向音痴の私はパニック。やたらうるうるするものだから益々混乱する。

店員さんらしき人に尋ねると、「ワタシ、ニホンゴワカリマセーン」

疲れ果て、とうとうタクシーに乗って

「東急ステイにお願いします」と

言う、

「すぐそこです」

「いいです。行つて下さい」

すぐそこだった。降りてみると、さつき目の前まで来ていたのにくやしい！

これだから東京はいやだななどと、田舎者のふてくされ。

翌日、無事に高知へ帰って顛末を話すと、

「何のためにスマホを持つちゅうが？」

聞けば、マップを開けて行き先を入力すると、自分のいる場所から目的の場所まで地図が出て、進行方向まで教えてくれるという。やってみると、なるほどちゃんと出るではないか。

「人は経験を通して成長する」

これでまたひとつ勉強ができました。ね、太郎。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役



ボク、知らない Zzz